

第1回 高松城跡天守台見学会

～ 堀の中から天守石垣を見よう ～



写真1 天守解体前の写真（明治15年12月30日撮影，ケンブリッジ大学蔵）



写真2 高松城跡天守台写真（内堀埋め立て前）

平成18年7月29日

高松市・高松市教育委員会

1. 天守台石垣の特徴は？

高松城は、生駒親正によって天正 16 年（1588）から築城された海城です。天守台も築城当初から存在したと考えられます。天守台石垣の改修記録はありませんが、寛文 10 年（1670）の松平頼重による天守改築に先立って、天守台石垣の改修があった可能性も考えられます。天守台石垣は野面石（＝加工していない自然のままの石）の乱積みによって築かれており、角は石材の長辺を左右交互にする算木積みになっています。石材は花崗岩が多く使われていますが、一部安山岩も使用されています。勾配は 60 度～70 度で、天端付近の 2・3 石に反りが見られます。

2. なぜ天守台石垣を修理しなければならないの？

高松城跡は築城から 420 年が経過しており、石材の劣化や度重なる地震により石垣の各所でハラミ・ズレ・ヌケといった現象が起こっています。また、明治の廃城後に植栽された松も石垣に悪影響を及ぼす原因で、平成 15 年には鉄門石垣の一部が崩れました。このように、史跡内の石垣が危険な状態であることから、平成 16 年度に石垣の危険度調査を行いました。この調査により、天守台石垣が最も危険であることを確認しましたことから解体修理を行うことになりました。なお、土木工学の専門家によると、天守台石垣は最も危険な部分では本来の石垣の曲線からすると 10%膨らんだ状態であり、危険な状態です。

3. なぜ堀を埋めているの？

天守台石垣は堀で囲まれているので、堀を埋め立てなければ工事が出来ません。埋め立てた堀は仮設道及び解体した石材の仮置き場としても利用します。なお、解体修理が終了した後は元のおり堀に戻します。

4. 工事や調査の予定はどうなっているの？

平成 18 年度は堀の埋め立て、玉藻廟の解体、天守台天端の発掘調査を行い、平成 19 年度に解体を行います。なお、石垣解体時にも立会調査を実施し、石垣の築造・改修年代を調べるとともに、破損原因を調べます。この調査成果を元に、平成 20 年度から復元の検討を行い、積み直しを実施する予定です。工事は公園緑地課が担当し、調査は文化振興課が担当します。なお、範囲や方法・期間については史跡高松城整備検討委員会や史跡高松城跡石垣検討委員会に諮りながら進めていきます。

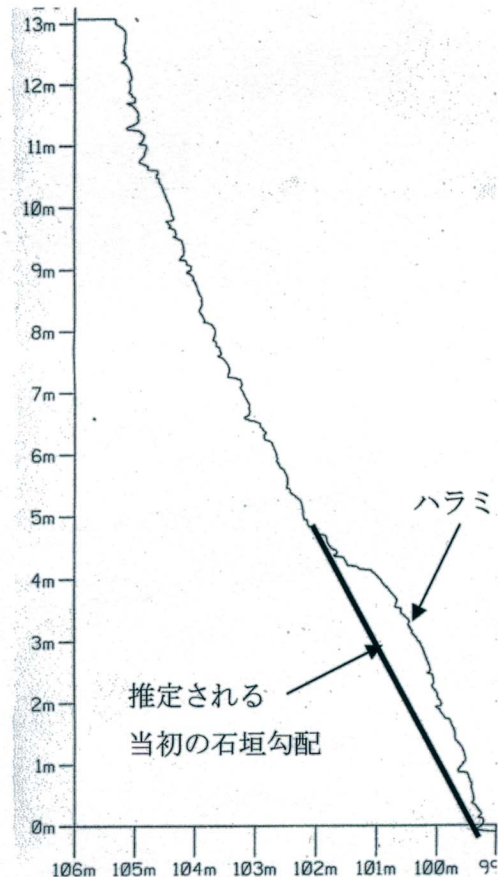


図 1 高松城天守石垣断面

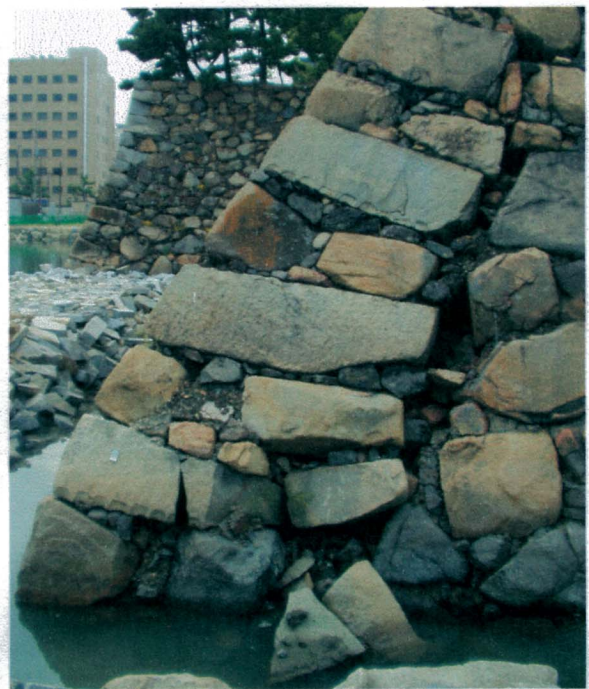


写真 3 高松城天守破損状況

表1 工事予定工程表

	平成 18 年度												平成 19 年度												平成 20 年度～											
埋め立て	■																																			
玉藻廟解体													■																							
発掘調査													■																							
石垣解体													■																							
石垣積直し																									■											

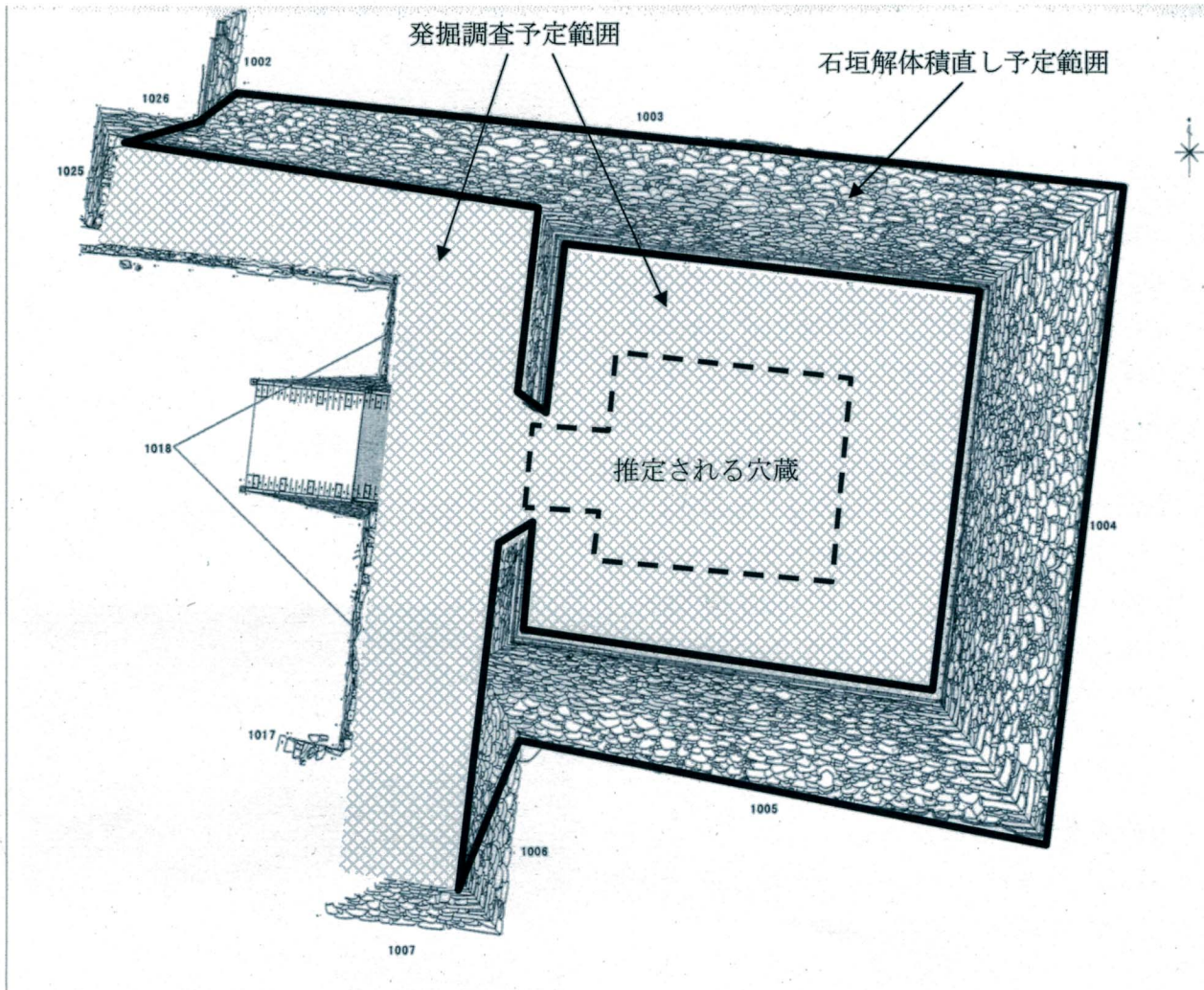


図2 石垣解体及び発掘調査予定範囲位置図

5. 発掘調査で何が分かるの？

古文書によると、高松城天守は3重5階建とされています。絵図や写真の外観では3重4階に見えることから、地下に穴蔵（1階部分）があったと考えられます。明治17年の解体時にどの程度壊されたのかにもよりますが、発掘調査では、この穴蔵の検出が期待でき、天守の柱の基礎となる礎石が見つかるかもしれません。さらに、天守解体時に不要となった瓦や木材が穴蔵の中に廃棄された可能性があり、当時の建築部材が発見される可能性があります。

石垣の解体中の調査では、石の積み方や石垣の裏側の栗石や盛土の状況を調査します。これにより、天守台

石垣の築造時期や改修の有無が判明します。また、石垣裏の盛土や栗石の状況を調べることで、石垣が破損した原因を特定することができます。復元時には元通りに復元しますが、破損原因は取り除くことにより、現在よりも安定した石垣にします。

6. どんな天守が立っていたの？

古文書や絵図によると、生駒期の天守は3重であったとされています。外観や内部の構造については記録が残っておらず不明です。この天守を建て直したのが、生駒氏の後に高松城主となった松平頼重です。天守は3重5階（3重4階+地下1階）建てで、寛文10年（1670）に完成しています。はじめは姫路城の天守を模倣しようとしたが断念し、小倉城の天守を真似たとされます。天守の最上階が下の階より張り出した南蛮造り（唐作りとも言う）で、さらに地上1階部分も石垣より張り出した構造となっていました。

その大きさは、『小神野筆帖』によると「高17間半、内石垣4間」とあります。このうち石垣の高さは本丸から天守台天端の高さと考えられ、地上部分の高さは13間半であることが分かります。当時の建物の1間は6尺5寸（約197cm）であることから推定すると、約26.6mとなり、シャチホコを加えると約28.6mとなります。石垣の根石部分から考えると、約42mにもなります。

7. 天守の復元はできるの？

天守については、写真で外観は判明していますが、内部の構造が不明であるため、復元の実現には至っていません。復元については、今後も資料収集を実施し、その資料を元に専門家を委員とする委員会で復元の可否について検討を行わなければならないという文化庁の指導があります。

現在、絵図・文献・写真等の収集を行っています。また、これから実施する発掘調査で得られる資料も貴重な資料となることが予想されます。これら資料を元に史跡高松城跡整備検討委員会や史跡高松城跡建造物検討委員会において審議して復元の可能性を見極めていくこととなります。

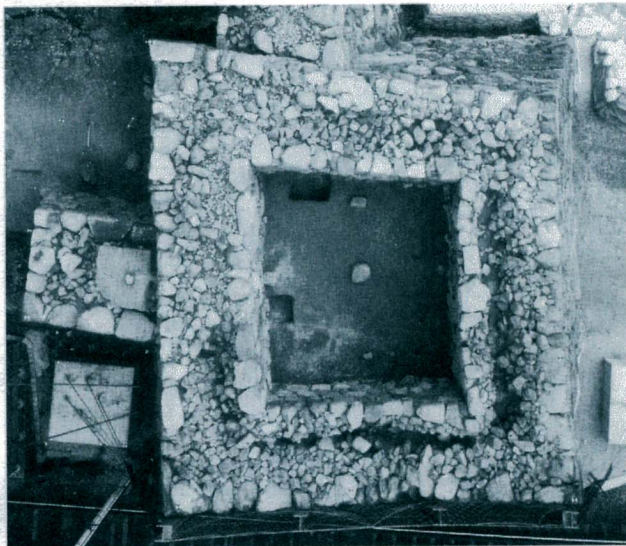


写真4 地久櫓台検出穴蔵

		『小神野筆帖』仁（瀬戸内海歴史民俗資料館蔵）	
		一天守五重間数高拾七間半	
		内石垣四間	
		天守台石垣上東西拾二間南北拾間半	
		シャチホコ高六尺五寸貞享四卯九月供（洪）水ニシテ	
		丸三尺三寸	
諸神之間	東西七間	南北六間	此疊八拾帖
二之間	同 五間	同 六間	此疊六拾帖
三之間	同 九間	同 八間	此疊百四拾四帖
四之間	同拾二間半	同拾一間半	此疊百八拾七帖
同 下	同 六間	同 五間	此疊六拾帖

ご案内

工事は長期にわたるため、今後も調査や工事に見学会を実施し、調査で分かったことや工事の進み具合を報告します。次回は発掘調査中（日時未定）を予定しています。

お願い

高松城跡の整備を行うため、絵図・古文書・写真など高松城に関する資料（天守に限りません）を探しています。資料がありましたらご連絡ください。ご協力をお願いします。